

# 日本英文学会中部支部 第72回大会(ウェブ開催)プログラム

---

## 研究発表・シンポジウム要旨

開催期間:2020年10月24日(土)～11月8日(日)

大会開催校:岐阜大学

開催場所:日本英文学会中部支部第72回大会特設ウェブサイト  
(特設ウェブサイトのURLおよびパスワードについては、会員の皆様に郵送および  
メーリングリストでお知らせします。)

主催:日本英文学会中部支部

共催:岐阜大学

日本英文学会中部支部事務局

〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1

国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学 地域科学部 内海智仁研究室内

E-mail: [chubu@elsj.org](mailto:chubu@elsj.org)

HP: <http://www.elsj.org/chubu/>

## 事務局・開催校からのお知らせ

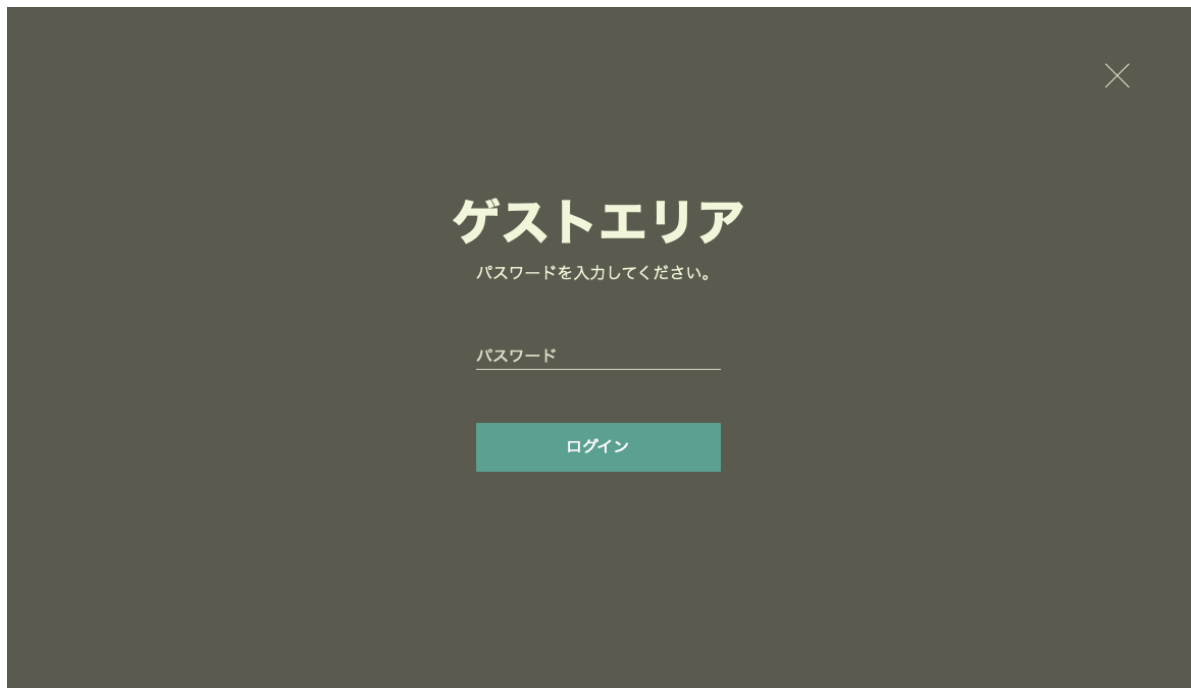
### 【ウェブ開催の概要について】

今回の中部支部大会は以下の要領で開催されます。

- ・発表者は、資料を原則としてPDF文書で特設ウェブサイトに掲載することで発表を行います。
- ・質疑応答については、質問受付フォーム（Google フォーム）による質問の投稿を募り、質問者と発表者とのやり取りを事務局が「質疑応答」ページに掲載します。

### 【特設ウェブサイトについて】

- ・特設ウェブサイトにはパソコンでもスマートフォンでもアクセスできます。URL およびパスワードについては、会員の皆様に郵送およびメールリストでお知らせします。
- ・特設ウェブサイトへアクセスすると、まず以下のような画面が表示されますので、あらかじめお知らせしたパスワードを入力し、「ログイン」と書かれたボタンを押してください。パスワードは半角（英数）文字でご入力ください。



- ・特設ウェブサイトに置かれたPDF文書の印刷・ダウンロードはできない設定になっています。
- ・今回の特設ウェブサイトは、支部事務局および大会開催校委員が、無料ホームページ作成サービス「Wix.com」を使って制作しました。そのため、ウェブサイト内に「Wix.com」自体の広告が表示されてしまうことをご了承ください。

# 日本英文学会中部支部第 72 回大会(ウェブ開催)プログラム

開催期間:2020 年 10 月 24 日(土)~11 月 8 日(日)

大会開催校:岐阜大学

開催場所:日本英文学会中部支部第 72 回大会特設ウェブサイト

## [特設ウェブサイト目次]

### 支部大会プログラム

支部長あいさつ 日本英文学会中部支部長 内田 勝

### シンポジウム

#### 第 1 室(イギリス文学)

『進行中の作品——文学作品の執筆過程を考える』

司会・講師 内田 勝 (岐阜大学教授)  
講師 上原 早苗 (名古屋大学教授)  
講師 道木 一弘 (愛知教育大学教授)

#### 第 2 室(アメリカ文学)

『ポストモダンの息子たち』

司会・講師 林 日佳理 (岐阜大学助教)  
講師 長澤 唯史 (相山女学園大学教授)  
講師 平川 和 (岐阜大学助教)  
講師 川村 亜樹 (愛知大学教授)

#### 第 3 室(英語学)

『言語資料・言語変化・言語理論:ことばの変遷について考える』

司会・講師 吉田 江依子 (名古屋工業大学教授)  
講師 柳 朋宏 (中部大学教授)  
講師 横越 梓 (名古屋工業大学准教授)  
講師 佐野 真一郎 (慶應義塾大学准教授)

### 研究発表

#### 第 1 室(イギリス文学)

司会 野々村 咲子(岐阜工業高等専門学校准教

授)

第 1 発表『『ジェイン・エア』と『ヴィレット』における孤児の遍歴:女性のアイデンティティと空間の問題』  
石井 麻璃絵(愛知大学助教)

第 2 発表「*Born in Exile* における偽善に潜む誠実さと自己欺瞞」

山田 敦子(刈谷北高等学校教諭)

第2室(イギリス文学)

司会 村井 美代子(三重短期大学教授)

第1発表「キーツの「消極的能力」に対するプライドと偏見—「カメレオン詩人」を夢見るキーツの企み—」  
楚輪 松人(金城学院大学教授)

司会 伊藤 裕子(中部大学教授)

第2発表「“Paler Horse, Pale Rider”から見る *Mrs Dalloway* における病いと不調の共同空間の可能性」  
四戸 慶介(岐阜聖徳学園大学専任講師)

第3室(英語学)

司会 久米 祐介(名城大学准教授)

第1発表「日本語・ゲルマン語に於ける二重目的語構文の統語構造」  
前澤 大樹(藤田医科大学准教授)

第2発表「等位接続の構造的多義性について:古英語における分離主語を中心に」  
山村 崇斗(筑波大学助教)

司会 川端 朋広(愛知大学教授)

第3発表「物体の空間関係表現の日英語話者による違いについて:英語前置詞 *in* とその日本語訳を中心に」  
藤原 隆史(松本大学専任講師)

# シンポジウム・要旨

## 第1室(イギリス文学)

### 進行中の作品——文学作品の執筆過程を考える

司会・講師 岐阜大学教授 内田 勝  
講師 名古屋大学教授 上原 早苗  
講師 愛知教育大学教授 道木 一弘

本のページに広がる文章は犯行現場に似ている。刑事が現場から犯行の証拠を探し出して犯行時の状況を再構築するように、ある種の文学研究者は、様々な痕跡に頼って、遠い昔に出版された作品が執筆されつつあった現場を再構成しようと試みる。具体的な執筆と推敲の過程を裏付ける証拠として、草稿が残されていれば運がいいし、そうでなくても種々の手がかりを元にして、その本がまだ「進行中の作品」であり、どのような最終形態を取るかも定かでなかった頃の、作者による執筆と書き換えの過程を推理することはできる。

そもそも文学作品が「進行中の作品」であることをやめて流動性を失うことはないはずで、同じ作品も、時代を超えて出会う新しい読者の脳裏には新しい形で刻まれることになるだろうし、そうした読者の何人かはアダプテーションを生み出して、元の作品のエッセンスをさまざまに変化させたうえで増殖させていくのだが、それはまた別の物語。今回のシンポジウムでは、元の作品の作者が着想を本の形にまとめるまでの過程のみに焦点を絞ることにする。

というわけで、われわれはそれぞれ18世紀のローレンス・スターン、19世紀のトマス・ハーディ、20世紀のジェイムズ・ジョイスを取り上げ、彼らの本の中で完成したふりをしている文章の時間を巻き戻し、それらがかつて「進行中の作品」であった現場を再現してみたい。

### 大事な「あれこれ帳」を取り戻せ——『トリストラム・シャンディ』の擬似草稿研究

内田 勝

ローレンス・スターン(Laurence Sterne)の贋自伝小説『トリストラム・シャンディ』(*Tristram Shandy*, 1759–67)の第7巻には、フランス旅行中の語り手トリストラムが、自伝執筆用のメモとして旅行中の雑感を書き留めた「あれこれ帳」(remarks)を紛失して大騒ぎする場面がある。トリストラムはどうか分散した「あれこれ帳」のページを回収して旅行記を書くことができたのだが、まるで行方不明の「あれこれ帳」を意外な場所で発見したトリストラムのように、実際には草稿が存在しない『トリストラム・シャンディ』の擬似草稿研究を、意外な方法で行ってみせた論文がある。本発表では、主としてこの Karen Harvey の論文“The Manuscript History of *Tristram Shandy*” (2014)の論旨をたどりつつ、あちこち補足を加えながら、作者スターンをはじめとする18世紀紳士階級の男たちが遺した備忘録(commonplace book)を手がかりに、『トリストラム・シャンディ』の執筆過程の重要な側面を再構成する企てに挑戦してみたい。

### 解釈の補助線——ハーディの自筆原稿を読む

上原 早苗

トマス・ハーディ(Thomas Hardy)の自筆原稿を見ると、一旦書かれた言葉の一部が螺旋状の線によって塗り潰されたり二重線で消去されたり、またその傍らで、ペンから新たに溢れ出た言葉が窮屈そうに、しかし、幾分誇らしげに自己主張する様子が見て取れる。通常、私たちが作家の作品に触れるのは活字テキストを通してだが、本文の揺らぎを視覚的に示す原稿には、原稿ならではの資料的価値があるだろう。

このシンポジウムでは、ハーディの後期小説の原稿内部の加筆削除に注目し、活字テキストを読み返してみたい。原稿内部の手入りを補助線に用いながら活字テキストを読み直し、通説とされる解釈が成立しえなくなる瞬間を捉えてみたいのである。そうした作業を通して、草稿研究の面白さ(の一端)を示すことができれば、と思う。

## テキスト産出の原理——ジョイスにみる頭韻とアナグラム

道木 一 弘

ジョイスの草稿研究はここ十年ほどで飛躍的に進んだ。Michael Groden や Dirk Van Hulle らによる発生論的批評 (Genetic Criticism)、すなわち、作品のソースと執筆過程を詳細に検討する研究と、その成果を公開するサイト James Joyce Digital Archive は、今や *Ulysses* や *Finnegans Wake* を研究する者には欠くことのできないツールになりつつある。

ただし、今回、私が試みるのは、こうした研究とは少なからず異なるアプローチである。ジョイスは草稿を執拗に書き替えたことはよく知られているが、同時に言語のもつ自律性に自ら身を任せるようなところがあった。かつて、脱構築あるいは意味の不確定性あるいは多義性が話題になったとき、ジョイスの作品が頻繁に言及されたのはこのためである。

ジョイス作品の言葉の自律的な働きにあらためて注目するに際して、特に頭韻 (alliteration) とアナグラム (anagram) を取り上げる。この二つの言語現象は、ジョイスの意識・無意識にかかわらず、彼のテキスト産出の鍵となると考えるからである。

ポストモダンの息子たち

司会・講師	岐阜大学助教	林	日佳理
講師	椋山女学園大学教授	長	澤 唯 史
講師	岐阜大学助教	平	川 和
講師	愛知大学教授	川	村 亜 樹

ポストモダンなるものは、いったいどこから来て、どこへ向かうのか——。1960年代から1980年代に隆盛をきわめたポストモダニズムは、1990年代から2010年代にかけて、その終焉が多く論じられることとなった(例えば Linda Hutcheon の *The Politics of Postmodernism* の2002年版エピローグや *Twentieth-Century Literature* 誌における2007年の“After Postmodernism”特集、David Rudrum と Nicholas Stavris による2015年のアンソロジー *Supplanting the Postmodernism* など)。しかし、何がポストモダニズムを終わらせたのか、そしてそのあとに来るものは何なのか、という問いについては、まとまった答えは出ていない。「ポスト・ポストモダニズム」や「メタモダニズム」、「デジモダニズム」など、研究者によって見解や呼称にばらつきがある中で、前世紀後半から今世紀初頭にかけてのアメリカ小説をどのような視点で捉えることが適切だろうか。本シンポジウムは、ポストモダニズムの中心的人物とされる Thomas Pynchon から Don DeLillo、そしてポスト・ポストモダニズムの旗手としてしばしば目される David Foster Wallace と Jonathan Franzen らの文学的活動をもとに、それぞれが先行する世代に投げかける批判や抱え込むジレンマなど、連続する時代のなかでの関係性に目を配りながら考察していくことで、ポストモダニズムを通過した1990年代以降の文学がどのようなものになるのか、検討していきたい。

みんなが終わったと考える「ポストモダニズム」とは何だったのか

長 澤 唯 史

「ポストモダニズムとはいったい何だったのか」という問いには、すでにポストモダニズムが終焉を迎えたという前提がある。もともとそれは、Jeremy Green が2005年に Don DeLillo や Jonathan Franzen らを論じる著書を *Late Postmodernism* と名付けたときに、すでに広く共有された認識だったのだろう。そして Post-Postmodernism すら登場した今、ポストモダニズムはすっかり「終わったもの」として葬り去られようとしている。

だがそもそも、その「終わった」とされるポストモダニズムとは何だったのか。本当に共通した認識は形成されていたのであろうか。ジョン・バーズらのいわゆる「ポストモダン」小説とリオタールの『ポストモダンの条件』の間に、本当に橋渡しはされていたのであろうか。Fredric Jameson の *Postmodernism, or the Cultural Logic of late Capitalism* (1991)で新自由主義的な解釈を施されたポストモダニズムと、Brian McHale が *Postmodernist Fiction* (1987) や *Constructing Postmodernism* (1992) で示した構築主義的なポストモダニズム解釈の間の齟齬はすでに解消されたのであろうか。今さらながらだが、マクヘイルのトマス・ピンチョン論などを参照しながら、私たちにとってポストモダニズムとは何だったのかを振り返ってみたい。

砂漠化する文体、滲み出るリズム——ポストモダン以降の DeLillo 文学

平 川 和

Don DeLillo はポストモダニズムが隆盛をきわめた1980年代に *White Noise* (1985) で一躍ポストモダンの代表作家として注目されるようになった。その後、世紀転換期にかけてポストモダニズムの終焉が論じられるようになったのと同時に、DeLillo の作風が変化したことは注目に値する。*Underworld* (1997) が 827 ページにわたり冷戦期アメリカを描き出す超大作だったのに対し、次作 *The Body Artist* (2001) はわずか 128 ページのミニマルな作品と化し、そ

れまでの DeLillo 文学を特徴づけてきた重厚な社会性・政治性は極端に削ぎ落されていたのである。このような切り詰めた文体は以降の作品でも顕著に現れており、一部の批評家は DeLillo の文体が「砂漠化」していると指摘する。一方で、そのようなドライをきわめた文体から、ある種の「リリズム」が滲み出ていることについては DeLillo 自身も意識的である。この作風の変化は果たしてポストモダニズムの終焉と関係があるのか、ないのか。本発表ではポストモダン以降の DeLillo 文学の傾向について探求してみたい。

「父なるポストモダニズムへ 心を込めて、デイヴィッド」——*Infinite Jest*と世代のジレンマ

林 日佳理

David Foster Wallace はインタビューやエッセイにおいて、自らが Barth や Barthelme らポストモダニストらの後の世代の作家であることを強調する。しかし、彼の創作姿勢はしばしば前の世代の作家への愛憎半ばする模倣とも読める。例えば Wallace が “next literary rebels” の条件として挙げるのは、アンチ-アイロニー、すなわち誠実さ (sincerity) の再評価であるが、その彼の作風はナイーブであると同時に、斥けたはずのアイロニーにかえって拘泥していると指摘される (Mary K. Holland)。本発表では、このような Wallace の「子」としてのジレンマを、*Infinite Jest* における Jim Incandenza の存在と結びつけながら考察する。Jim の映画監督としての業績はしばしばポストモダニックなものだと捉えられるが、彼の子供たちの世代はその影響力の強い遺産とどのように対峙し、応答するのだろうか。Jim の遺作である “*Infinite Jest*” が、全米中を麻痺に陥れるテロリストたちの道具と目されることも含めて、残された世代のジレンマを Wallace 自身の創作活動の原動力として考察してみたい。

Jonathan Franzen の *The Corrections* における哀悼と癒し

川村 亜樹

Don DeLillo の系譜に属し、親友 David Foster Wallace の死を悼み続ける Jonathan Franzen は、*The Corrections* (2001) での全米図書賞受賞をブレイクスルーとして、Stephen J. Burn の言葉を借りれば、*Jonathan Franzen at the End of Postmodernism* (2008) といった作家としてアメリカ文学史に登場する。特に *The Corrections* では、ポストモダニズムへの反動として、主要登場人物 Chip Lambert が Jean Baudrillard を援用したカルチュラル・スタディーズの授業で学生に論破されるだけでなく、映画の脚本家を目指すなかで困窮し、後期資本主義をラディカルに批判するために購入した Fredric Jameson のものを含めた書籍を二束三文で売り払い、皮肉の込められた笑いをもたらすが、その一方で、父の死と向き合うなかで癒しを得ている。そこで本発表では、Wallace への哀悼を念頭に置き、エッセイ “Mr. Difficult” (2002) でのポストモダン作家についての議論を参照点として、Franzen 文学の特徴の一つともいえる、ポストモダンを経たリアリズム小説 *The Corrections* が提示する癒しの文学的価値について検討したい。



言語資料・言語変化・言語理論:ことばの変遷について考える

司会・講師	名古屋工業大学教授	吉田	江依子
講師	中部大学教授	柳	朋宏
講師	名古屋工業大学准教授	横越	梓
講師	慶應義塾大学准教授	佐野	真一郎

ことばは常に変化する。それは数千年という長い期間だけでなく、数百年、数十年あるいはたった数年単位でも変わるものである。このような言語変化の様相を探るためにはそれぞれの変化に応じた言語データが必要不可欠であることは言うまでもなく、それを収集するための様々なコーパスがこれまでに開発され利用されてきた。それに加え、近年ではインターネットの発達に伴い、オンライン化によるコーパス利用やツイッターに代表されるSNS上の言語データなども登場し、言語資料の新たな利用可能性が広がってきた。これからの言語研究にどのように利用できるのか検討することは必要であろう。また、言語変化の分析は収集した言語データをどのように読み解くのかも重要である。同じ言語事実に対してもどのような角度——すなわち理論的枠組み——から分析するかによってその見え方は異なってくる。以上を踏まえ、本シンポジウムでは各講師が数百年、数十年、数年単位の「言語変化」の事例についてそれぞれの「言語資料」「言語理論」を使って具体的な分析を提示する。言語資料の特徴を知り、それをどのように使って言語研究につなげるか、言語変化研究の可能性を追求したい。

言語変異と言語変化:他動詞虚辞構文に対する汎時的分析の試み

柳 朋宏

本発表では、言語変異に対する共時的視点と言語変化に対する通時的視点の双方向から、英語における他動詞虚辞構文の歴史の変遷を汎時的に分析する。他動詞虚辞構文は後期中英語から初期近代英語にかけて用いられていたが、標準現代英語では非文とされている(Ingham 2003; Jonas 1996; Tanaka 2000)。しかしながら、アメリカ東部で話されているアパラチア英語(Appalachian English)では、類似の構文(分離主語構文)が用いられている(Bernstein and Zanuttini 2012; Zanuttini and Bernstein 2014)。アパラチア英語はスコットランド系アイルランド人がもたらした古スコッツ語(Older Scots)から発達したものであり、古スコッツ語においても分離主語構文が用いられている。Bernstein (2018)では2種類の構文の類似点・相違点が指摘されている。本発表では、地域変種・通時コーパスを用いて、アパラチア英語・古スコッツ語における分離主語構文の特性から、中英語・近代英語における他動詞虚辞構文の特性と、その通時的変化について論じる。

ツイッターを利用した流行語の変遷に関する研究

横越 梓・吉田 江依子

流行語とは「ある時期、多くの人々の間で盛んに使われる語や言い回し」(大辞泉)、「ある期間、興味を持たれて多くの人に盛んに使用される語」(広辞苑)のことを指す。流行語は言語変化の一例であり、言語学分野においては流行語となる語彙の特徴やその変化の原因の追究が主たる興味の対象になっている。しかし従来の説明は、何故その語が(そしてそのみが)流行し、そして廃れていくのか、主観的な記述の域を出ることはなく、客観的・理論的な説明付けはなされていないように思われる。(吉田 2020)本発表ではそのような問題点を踏まえ、日英語の流行語・新語についてツイッターから得られたデータを言語資料として数量的調査を行い、その変遷の理由を生成文法理論の観点から論じたいと考える。ツイッターを用いた研究は近年盛んになっているが、それをどのように利用するか、また言語資料としての問題点などについても検討したい。

## コーパスのオンライン利用と言語研究の可能性

佐野 真一郎

近年の技術発展に伴い、様々な研究資源の整備・拡充が進んでいる。コーパスも例に漏れず、これを用いた研究も増加の一途を辿っている。2010年代以降は、コーパス利用のオンライン化も進められ、利便性も更に高まっている。本発表では、日本語・英語それぞれについてオンライン利用が可能な代表的コーパスの特徴と、それらを用いた研究事例を紹介し、言語研究の新たな可能性を考える。まず日本語について、国立国語研究所による『中納言』から利用できるいくつかのコーパスを用いた「ら抜き言葉」の数量的研究を紹介する。英語については、[English-Corpora.org](http://English-Corpora.org)からオンライン利用のできるコーパスを用いて、単語使用の通時的変遷に関する分析を紹介する。現在様々なコーパスが利用可能であるが、共通のオンライン検索ツールにより、複数のコーパス間比較を比較的容易に行うことができる。このことは、言語研究の可能性を拡大すると言える。

# 研究発表・要旨

---

## 第1室(イギリス文学)

司会 岐阜工業高等専門学校准教授 野々村 咲子

### 第1発表

『ジェイン・エア』と『ヴィレット』における孤児の遍歴:女性のアイデンティティーと空間の問題

愛知大学助教 石井 麻璃絵

近年の家庭性(domesticity)の研究はその建築面に重点を置き、19世紀ミドルクラスの家が階級・ジェンダーの壁によって内部が分割された複合的な空間であったことを指摘する。こうした研究は家(もしくは部屋)が社会における個人の立ち位置を示すだけでなく、しばしば文学や理論のなかで家庭の中心として描かれた女性の空間が実のところ小さく、限られたものであったことを示唆する。本発表は、ヴィクトリア朝作家であるシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』と『ヴィレット』の孤児のヒロインに注目し、家庭内における女性の使用空間の拡大の可能性を探る。自身の曖昧な社会的アイデンティティーを武器に女性の「ふさわしい場所(proper place)」とされた客間から抜け出す彼女たちは、最終的に従来のミドルクラスの家と異なる構造の家を手に入れる。このことから社会的構造物としての「家」が19世紀の「個(individuality)」の拡大とともに変容していることを指摘する。

### 第2発表

*Born in Exile* における偽善に潜む誠実さと自己欺瞞

刈谷北高等学校教諭 山田 敦子

George Gissing 作 *Born in Exile* (1892) を取り上げて偽善を考察する。英国では資本主義経済の発展や教育の拡大により階級制度に変化が生じ、後期ヴィクトリア朝には個人の努力で社会上昇が可能となった。そのため、貧しいが知的な若者の多くは、野心を抱いて高い階級に入り込もうとしていた。下層中産階級の Godwin Peak も上昇志向が強く、出世を人生の目的としている。彼は結婚を利用して社会上昇するために、敬虔な神学生のふりをして聖職者を目指す。しかし、彼は元来誠実で嘘がつけない人物であるため、信仰の偽りにより自己欺瞞に陥る。誠実を貫いて出身階級にとどまるか、心にもない信仰を装うことで社会上昇の機会を得るかというジレンマに陥って、彼は自己矛盾に苦しむ。時代精神と社会風潮および英国の伝統的な階級制度に注目して、当時の特徴的事象である社会移動の観点から偽善を論じる。

第1発表

キーツの「消極的能力」に対するプライドと偏見——「カメレオン詩人」を夢見るキーツの企み——

金城学院大学教授 楚輪松人

いま、キーツの造語「消極的能力」が熱い。ワーズワスの「賢い受動性」やコールリッジの「積極的な不信の停止」と並んで、ロマン派詩人を語る上での標準句 (*locus classicus*) の一つである。2009年、Li Ou が証明したように、この語は周知の語でありながら、驚くほど未調査の概念である。その後、2019年には Li Ou の論考を敷衍して Brian Rejack らによって 16 の論文を収めた論文集も刊行された。本発表ではこの用語に対する①肯定的、②否定的、③破壊的の、3つのアプローチを検証する。①この語にクローズアップして後代の研究の嚆矢となった W.J. Bate の正典的研究、②この語を文学以外の領域で用いて市民権を与える契機となった Woody Allen の 1979 年の映画 *Manhattan*、そして、③この語を自家薬籠中の物とした結果、鼻疽の引き倒しとなった著作の数々。一つの専門用語 (*jargon*) がなぜこれほどの盛況と混乱を招来することになったのかを検証していく。

司会 中部大学教授 伊藤裕子

第2発表

“Paler Horse, Pale Rider”から見る *Mrs Dalloway* における病いと不調の共同空間の可能性

岐阜聖徳学園大学専任講師 四戸慶介

本発表では初めに、インフルエンザの影響が色濃く表れ、その病いを扱った作品として広く知られる Katherine Anne Porter の “Pale Horse, Pale Rider” (1939) におけるインフルエンザの明確な描かれ方を考察する。この考察は、詳細にインフルエンザパンデミックを描かなかつた／描けなかつたゆえに、Virginia Woolf の *Mrs Dalloway* (1925) が持つ病いの描写の微妙さを吟味する手助けとなる。*Mrs Dalloway* におけるインフルエンザ、戦争神経症そして更年期障害といった病いや不調の描写がそれぞれどのように絡み合い、どのように距離がとられているのかを考察し、このテキスト内において病いと不調で繋がる人々の共同空間のようなものが構築されうる可能性を、そして、*Mrs Dalloway* というテキストがこれ以降の Woolf の作品で表れてくる日常的、私的な不調 (*ailments*) を持つ人々を描くに至る過渡期として位置づけられる可能性を探りたい。

第1発表

日本語・ゲルマン語に於ける二重目的語構文の統語構造

藤田医科大学准教授 前澤 大樹

本発表の第一の目的は、日本語の「教える」類の動詞が示す(1)の交替に原理的説明を与えることである。

(1)に見るように、「教える」は受領者を二格でもヲ格でも標示することができる。

(1) a. 太郎が(子供たちに)英語を教えた。

b. 太郎が子供たちを(\*英語を)教えた。

詳しく観察すると、「教える」類に2通りの構造と格付与特性を認める必要と、項の具現への Poser (2002) の「深層二重ヲ格制約」の関与が明らかとなる。

本発表では内在格付与の一般的機序を提案した上で、Harley (2002)らに基づく分節的な動詞句構造を仮定する。その下で、(1a, b)に対応する2通りの構造の格付与特性は、節主要部上の意味素性の分布及び素性継承パターンから導かれ、二重ヲ格制約にも原理的説明が与えられる。

また、本発表はこの分析をゲルマン語の二重目的語構文に拡張し、項のA・ $\bar{A}$ 移動可能性の言語間の違いが、当該言語が(1a)・(1b)何れのタイプの構造を許すかという観点から率直に説明されることを示す。

第2発表

等位接続の構造的多義性について: 古英語における分離主語を中心に

筑波大学助教 山村 崇斗

意味上は等位接続関係にある二つの主格名詞句が、表層語順では、第一要素が規定の主語位置に、第二要素が等位接続詞を伴って文末に生じる、(1)のような現象が古英語で観察される。

(1) ond æfter ðam Hengest feng to rice ond Æsc his sunu (ChronA 455)

‘and after that, Hengest and his son Æsc took (forfeited) kingdom’

等位接続された主語 DP が非分離状態で規定の主語位置に生じると動詞は複数屈折するのが標準的であるが、(1)のように分離状態になると、動詞は第一要素とのみ一致するという観察がある(Mitchell (1985), (Sielanko (1995))). 本発表では、非分離主語と分離主語が動詞形態論に及ぼす影響の違いに着目し、等位接続構造が集合併合で構築されるか、対併合で構築されるかの構造的相違によって、当該の現象が説明されることを示す。

第3発表

物体の空間関係表現の日英語話者による違いについて: 英語前置詞 **in** とその日本語訳を中心に

松本大学専任講師 藤 原 隆 史

英語の前置詞は「ある物体の中に別の物体がある」(something is enclosed by another)という空間関係を表す意味をコアとして、メタファー的に抽象的な領域へと意味拡張するとされている。例えば、Lee (2001) では、the cat in the house というプロトタイプ的な意味から、the bird in the tree といった周辺的な意味用法へと意味が拡張していると説明されている。しかし、この日本語訳「木の中の小鳥」(宮浦, 2006 による)は日本語的な感覚からは別の意味解釈、例えば、「くりぬかれた木の幹の中にいる鳥」等をも許容する。特に英語教育において、このような英語的感覚と日本語的感覚のズレの問題は深刻である。本研究では、日英語間の意味解釈のズレを事態把握の違いに求め、英語前置 **in** の意味解釈における英語話者と日本語話者の感覚のズレについて報告する。主に、物体と物体の空間関係を表現した図を用いた、日英語話者間の意味解釈の違いに関する調査とその結果を報告する。

## 大会関係役員・委員一覧

支部長	内 田 勝	(岐阜大学)
副支部長	長 澤 唯 史	(椋山女学園大学)
支部選出評議員	滝 川 睦	(名古屋大学)
支部代表理事	内 田 恵	(静岡大学)
事務局長	内 海 智 仁	(岐阜大学)
事務局長補佐	林 日佳理	(岐阜大学)
書記	平 野 順 雄	(椋山女学園大学)
監事	中 川 直 志	(中京大学)

### 大会準備委員 (◎委員長 ○副委員長)

#### 英文学

- 丸 山 修 (静岡大学)
- 三 原 穂 (愛知県立大学)
- 伊 藤 裕 子 (中部大学)

#### 米文学

- 鈴 木 元 子 (静岡文化芸術大学)
- 竹 野 富美子 (東海学園大学)

#### 英語学

- ◎吉 田 江依子 (名古屋工業大学)
- 久 米 祐 介 (名城大学)
- 松 元 洋 介 (中京大学)
- 川 端 朋 広 (愛知大学)

### 大会開催校委員

- 内 田 勝 (岐阜大学)
- 内 海 智 仁 (岐阜大学)
- 林 日佳理 (岐阜大学)
- 平 川 和 (岐阜大学)